

# 通常学級における発達障害のある児童に対する 支援の現状と課題

## — 通常学級担任教師へのインタビュー調査による検討 —

発達障害のある児童に対する治療や教育の目的は、児童に応じたサポートや教育を行い、健全な育ちを支えることによって、社会的な適応障害を防ぎ、障害を持ちつつ適応していくことができるようにすることである。そこで本研究の目的は、小学校通常学級における発達障害のある児童に関連する問題状況、及び、それに応じた教育や支援等の働きかけについて、担任教師の視点からどのように捉えられているかを検討することとした。研究協力者として、大阪府北摂の同一市内の5小学校から1名ずつ、5名の通常学級の担任教師の参加を得た。研究協力者の属性として、性別は男性が3名・女性が2名、年齢は20代1名・30代が4名、担任学年は5・6年、教師経験年数9～12年であった。研究方法として、2018年7月～8月に、研究協力者の所属校にて半構造化面接を実施し、M-GTAを用いて分析した。今研究では、発達障害のある児童を、診断の有無に関わらず、行動の特性や状態等から発達障害の可能性があると学校全体で見なされている児童とした。また、支援学級に在籍している児童についても通常学級で学んでいる場合は対象とした。その上で、現在学級にいる対象の児童と、これまでに担任した児童の中で印象に残っている児童や、苦勞や学ぶことの多かった児童について聞き取った。

その結果、43の概念を抽出し、以下の9のカテゴリーに分類した。発達障害のある児童と関連する問題状況として、①特性によるものと、②特性から派生した二次的な問題状況があることが示された。それに対応して教師は、③発達障害のある児童への個別対応と、④学級全体への働きかけと、⑤保護者との連携・支援を、並行的に行っていることが示された。その際、教師は児童の問題状況や学校事情に応じて、⑥学校内の組織や人と連携・協働し、その組織を通じて⑦学校外の専門機関と連携していることが示された。また、⑧学校内の特別支援教育推進体制として設置された特別支援教育コーディネーターや個別の支援計画等はあまり意識化されていないことが示された。⑨教師の発達障害についての学びについては、教師は発達障害のある児童と出会い、取り組むことによって、体験的にも知識としても次第に学ぶことが示された。本研究から、担任教師は多くの時間と労力を費やし、工夫しながら、発達障害のある児童、学級全体、保護者に並行して働きかけ、その際に、必要な人や機関と連携していることが示されたと言える。この結果は、本研究協力者が困難な状況に陥った児童達の学年の担当を任されていることなどから、熱心な教師によるモデルであると言える可能性がある。今後、より広範な教師を対象に調査を行う必要があると考える。また、専門的な機関との連携や支援が、問題状況の早期の時点や、予防的な働きかけにおいては、十分に活用されていないことを指摘することができる。さらに、研究の発展として、教師の経験による変化に焦点を当てた面接調査を行うことによって、教師の学びの過程をより明確に示すことができるのではないかと考える。